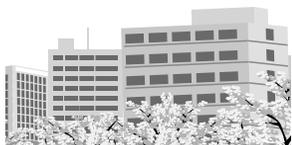


会員の広場



縁が縁をつくる

加藤美子（東京）

27年前、書店を東京の青梅市から立ち上げました。当時は大型書店などなく、地域一番店を目指していた。しかし、順調な道のみではありませんでした。本というものは注文すれば注文した数だけ入荷するものではなく、売り上げの実績に応じて分配されていくシステムであることを経営してから知りました。ですが、お客様はそんなことは知りません。その書店になれば他の書店に

行くだけです。まず、売れるものをたくさん仕入れるにはどうしたらよいか、から始まりました。出版社や取次という中卸に足しげく通い、熱意と誠意で勝ち取っていったといっても過言ではありません。

このように自分なりに、出版、取次、小売書店についてはノウハウを築き上げてきた私ですが、経済や財界とは本当に縁がありませんでした。そんな私に「東洋経済新報社でやっている経済倶楽部に入会してみない？」と声がかかったのが、昨年のことでした。紹介くださった金野清子さんは、EPOCH（エポック）という出版、取次、書店業の有志で構成された女性だけの集まりで知り合いました。エポックとはElegance, Peace, Organize, Culture & Healthの頭文字を取り、命名したそうです。「優美な行動と穏やかな心で、文化の薫り高く健やかに、今をともに分かち合おう」という主旨です。

書店の世界だけを見てきた私にとって、この異業種

交流会は、とても新鮮なものに映りました。働いている女性ならではの物の見方、価値観に接し、自分もそれなりに書店業に関してはわかっていたつもりでしたが、異業種ならではの多様性に心や感性を磨き、磨かれました。この会を紹介してくれた厚木の書店さんには今でも感謝しております。「本」というものの一連の流れを肌で感じ取れたように思えるからです。

また、私は5年前から、福生市の教育委員をしています。教育というのは生徒と先生を結びつけることから始まり、これも大きな「縁」の仕事だとも感じています。核家族や少子化により、子どもを家族だけで教育し養っていくのには限界があります。子ども一人ひとりにたくさん「縁」ができるように、地域の人や保護者の有志で放課後に勉強や手遊びなどを教える「福生っ子広場」を推進しています。人は一人では生きていくことはできません。助け合うには、なるべく多くの人の「手」が必要となります。それを生み出すのは「縁」よ

りほかにありません。出合いがあり、友好を深め、それがまた、新たな「縁」をつむぎだしていくのです。

「本」という一つのカテゴリーとしてまとまっている世界から、もっと広く多種多様な経済倶楽部への入会は、正直少し躊躇がありました。入会しても続けられるか不安もありました。しかし、何事にも積極的に前向きな生き方をしている金野さんが入っている会ならば、また浅野理事長とは以前から縁があったので、これもまた「縁」だと感じ、入会しました。

震災後、今まで以上に「縁」というものを深く考えるようになりました。経済倶楽部では会食や喫茶が気軽にでき、見学会、映画鑑賞、囲碁等も楽しめるようになっています。人が触れ合って友好を深めていく原点があるように思えるのです。ですから、ここでの交友を私は大切にしたいと考えています。まだまだ未熟で新参者の私ですが、見かけましたら、気軽にお声をかけていただけたら幸いです。